

市 勢

市
勢

1	沿	革	3
2	位 置 及 び 地 勢	4	
3	市 域 の 変 遷	5	
4	人	口	6

1 沿 革

何億年のむかし、現在の熊本市の大部分は一面の海底で、処々に小島が散在するに過ぎなかったと想像されるが、その後数次にわたる地表上の大変動によって、次第に熊本平野が形成されるにともない、現在の出水・健軍方面の砂礫層から湧きでる清冽な泉をめぐって、縄文人・弥生人の聚落が完成されていった。

古墳時代を経て飛鳥時代に入り、大化の改新（645年）が行われると、託麻の三宅郡（今の出水地方）には、肥後の国府「託麻府」が設けられ、宏壮な伽藍の国分寺の建立を見たが、これらを中心とした聚落が形づくられ大きくなったものが、熊本市の始まりである。

奈良朝前後の日本各地は、国力の大小によって、大・上・中・下と四等級に区別されていたが、肥後はそのころ農産物産出量で九州諸国中群を抜いており、延暦14年9月（平安の初期）に至って、全国中でも優位の資格を認められ「大国」に昇進した。

この期に国司として、肥後に赴任した道君首名、紀夏井、藤原保昌、清原元輔等はいまも幾多の遺跡を留めているが、とくに後撰集の選者で、清少納言の父元輔と、平安期歌人「檜垣女」との交遊の説話は有名である。

南北朝50年間は、戦乱の日が相つぎ、熊本地方もしばしば軍営の場に利用された。

長い戦乱のあと、天下が統一されるや、肥後全土の守護職は改めて菊池氏に委ねられ、一国政令の中心は隈部（現在の菊池市）の方に移った。

降って、応仁の頃菊池の一旗出田三郎秀信は、いまの熊本城東部の丘陵に千葉城（熊本城の始め）を構えたが、次の鹿子木親員が、明応年間（1490年代）に、今の古城の地に居城を移し、隈本城と称えた。ついで、城親冬と、佐々成政のあとを承けて天正16年（1588年）加藤清正が入城するにおよんで、清正は国府の二本木方面から、寺院、商家などを移転させて、城下町の経営に着手した。また、この清正は熊本の自然に、はじめて大規模な人為のツルハシを振った武将で、河川、その他の土木事業に残した功績は大きく、熊本市が城下町としての体裁を整えてきたのは、このころからである。日本三名城の一つとうたわれる熊本城は、この清正が慶長6年から12年にかけて、7カ年の歳月を費して築城したものである。（築城年については異説もある）

細川氏時代は、寛永9年細川忠利の入国によって始まるが、細川氏は自来大政奉還の日に至るまで、200有余年間にわたって肥後熊本政治を行った。この細川氏は、歴代名君相つのだが、そのうち、もっとも注目すべきは、延享4年藩主となった8代重賢の政治であろう。このとき国政揚り、教学も大いに振興した。とくに藩校「時習館」や、全国にさきがけて創設された医療ないし教育機関としての「再春館」、薬草研究で有名な「蕃滋園」などは、本市が長く文教の府として全国に秀でた因となった。また忠利のときに創建された水前寺（成趣園）は、幽斉ゆかりの古今伝授の間とともに、いまも熊本市の観光資源の一つとなっているが、晩年を熊本に送った剣聖宮本武蔵の遺跡も、熊本が持つ誇りの一つといえよう。

明治4年7月に入って、廃藩置県の大詔が出されると、肥後には、熊本、人吉の二県がおかれ、ついで同年11月改めて熊本、八代の二県となった。ところが翌5年6月熊本県は、ふたたび白川県と改称され、翌々6年1月には八代県が廃止されて、白川県に併合されたため、肥後全域は白川県の所轄となり、熊本市には県庁が設けられた。これは明治9年1月まで続いたが、同年2月さらに改めて熊本県と称せられるようになった。

このころ熊本城には鎮台がおかれ、市内には洋学校と、西洋医学の熊本医学校ができて熊本市は城下町としてにぎわいを見せていたが、9年の神風連事件、翌10年の西南の役と引き続き大きな戦禍に見まわれ、とくに西南

の役では、全市街が焦土と化してしまった。22年4月、市制が施行されるとこれまでの「熊本区」は、「熊本市」と改められた。

明治の初年から、九州における政治・軍事の中心として、各種の官庁が置かれていた熊本市は、24年鉄道の開通によって熊本駅が設けられ、又30年代に入って市区改正の大事業が行われ、中央部の山崎練兵場が市外に移されて新市街が出現するや、会社、工場、商店その他施設が続々と軒を連ね、日清、日露の戦勝の意気も加わって、明治の隆昌期を現出した。

大正10年、周辺11カ町村を併合して大熊本市の基礎を固め、私鉄菊池軌道、熊本軌道、御船鉄道及び国鉄宮地線の開通整備と並んで13年には、市電の開通があり、更に上水道施設、二十三聯隊の移転等によって、いよいよ近代都市の面目を新たにすることになった。

しかし、昭和20年には空襲を受けて全市の大半は瓦礫と化したが、その後全市民の不斷の努力によって、戦災、水害等各種の苦難を克服し、今日の隆盛を見ることができた。

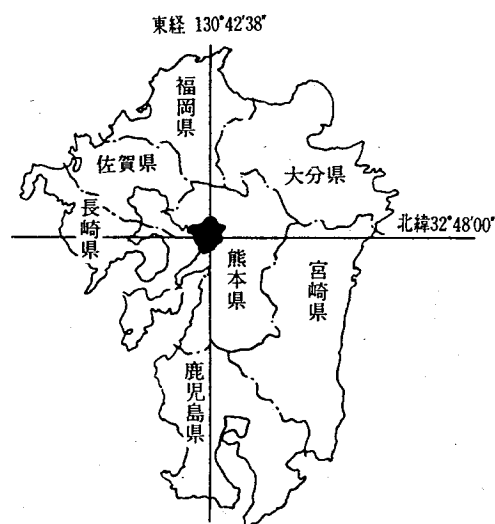
市制施行当時は、面積5.55km²、人口4万2千余人を数えるにすぎなかったが、近代的都市機能の集積や平成3年2月の飽託4町との合併をはじめとする16次にわたる市域の拡大等により、今や、面積266.31km²、人口66万人を超えるまでに成長した。また、平成8年4月に中核市へ移行し、名実ともに地方中核都市として着実な発展を続けている。

現在は、熊本西環状道路などの地域高規格道路、重要港湾熊本港、九州新幹線の建設など、交流の基盤となる広域交通インフラの整備を促進し、熊本城の復元、上通や手取本町地区などの中心市街地再開発、熊本駅周辺の整備など、交流の拠点となる地域整備に取り組んでいるほか、高度情報化社会に対応した情報インフラの整備、食品工業団地を中心としたバイオテクノロジーの振興、環境保全産業の育成など、これからの成長が見込まれる新産業分野の開拓を図ることとしている。

このように、本市では、新世紀に向け、九州の中央に位置する地理的特性を活かし、人、ものなど多様な交流を基調としながらまちの魅力と活力を創出し、日々の暮らしの中で全ての市民がしあわせを実感できるまちづくりに取り組んでいる。

2 位置及び地勢

(1) 位置



熊本市は、ほぼ九州の中心に位置している。九州の陸の大動脈ＪＲ鹿児島本線の間地点は熊本駅であり、これより豊肥本線、三角線が分岐し、門司～鹿児島を結ぶ国道３号と大分～長崎を結ぶ国道57号は本市で交差している。さらに本市を貫通する九州縦貫自動車道も門司から鹿児島・宮崎まで開通をみるなど、地理的に九州の中央にあつて交通の要衝的位置にある。

また本市は、観光面からも別府～阿蘇～熊本～天草～雲仙～長崎を結ぶ九州の国際観光ルートの中心地として大きな役割を果たしている。

(2) 地 勢

熊本市は県の中央部にあって有明海に面し、坪井川、白川、緑川の３水系の下流部に形成された、いわゆる熊本平野の大部分を占めている。また阿蘇火山と金峰山系との接合地帯の上に位置する本市は数多くの山岳、丘陵、大地、平野等によって四方を囲まれている。

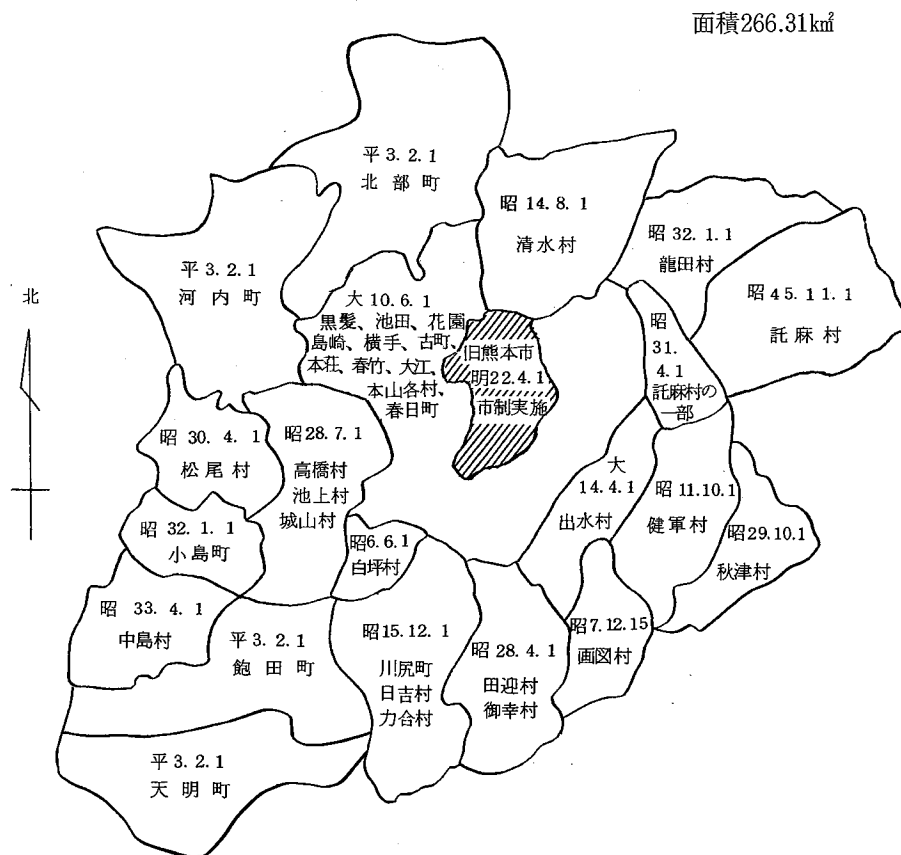
市域の西北方は金峰山地、北部は台地、東部は遠く阿蘇山地に囲まれ、東方から西南にかけて開けている。

西北部は金峰山系の急傾斜の山が重なる一方、中心部は阿蘇火山に源を発する白川と北方の鹿本郡界に流れを発する坪井川・井芹川が市街を貫流して西方の有明海に注いでいる。

水源を水前寺・江津湖に発する流れは木山川と合して加勢川となり、本市の南部を流下している。これらの川は、かんがい水として南部および西部一帯の平野を潤し、農作に大きな効用をもたらしている。

また西部の海岸地帯は、大部分が干拓地で地形的な変化に乏しく、河口部の河床は白川、坪井川による阿蘇ヨナ質土壌の送流により次第に上昇している。

3 市 域 の 変 遷



(4) 校区別人口及び世帯数

(平成7年国調)

地区・ 校区別	世帯数	人 口			地区・ 校区別	世帯数	人 口		
		総 数	男	女			総 数	男	女
総 数	246,700	650,341	310,118	340,223	清 水	4,419	11,978	5,506	6,472
中央地区	68,557	143,332	66,993	76,339	城 北	3,368	10,700	5,663	5,037
城 東	905	1,952	747	1,205	麻生田	3,114	9,182	4,300	4,882
慶 徳	1,377	2,536	1,103	1,433	楡 木	2,264	6,280	2,933	3,347
五 福	1,479	3,306	1,364	1,942	楠	2,611	7,214	3,435	3,779
一 新	4,474	9,883	4,238	5,645	武 蔵	2,394	6,869	3,302	3,567
壺 川	4,065	8,802	4,019	4,783	弓 削	1,437	4,525	2,128	2,397
碩 台	3,047	6,257	2,547	3,710	龍 田	4,862	13,986	6,853	7,133
黒 髪	10,075	17,885	9,360	8,525	西 里	1,876	6,450	3,106	3,344
託麻原	8,917	18,272	9,691	8,581	北部東	2,380	7,010	3,324	3,686
大 江	5,222	10,326	4,906	5,420	川 上	2,496	8,168	3,822	4,346
白 川	3,509	7,066	3,032	4,034	西部地区	25,278	75,321	35,447	39,874
白 山	4,986	11,018	5,190	5,828	白 坪	4,721	12,388	5,789	6,599
出 水	3,881	7,928	3,488	4,440	城 西	5,240	14,003	6,454	7,549
春 竹	6,131	14,521	6,695	7,826	花 園	4,809	12,474	6,130	6,344
本 荘	2,085	3,975	1,626	2,349	城 山	2,767	8,814	4,153	4,661
向 山	3,820	8,746	4,003	4,743	高 橋	217	635	291	344
古 町	1,539	3,664	1,619	2,045	池 上	2,256	7,003	3,259	3,744
春 日	3,045	7,195	3,365	3,830	松尾東	779	2,544	1,206	1,338
東部地区	72,272	198,142	95,925	102,217	松尾西	393	1,400	666	734
託麻北	2,417	7,615	3,711	3,904	松尾北	66	251	124	127
託麻東	3,088	10,681	5,250	5,431	小 島	1,041	3,539	1,655	1,884
長 嶺	3,757	10,983	5,332	5,651	中 島	1,052	4,100	1,928	2,172
託麻西	5,933	16,348	7,993	8,355	河 内	1,340	5,758	2,639	3,119
託麻南	3,385	10,768	5,301	5,467	芳 野	597	2,412	1,153	1,259
西 原	6,237	14,365	7,434	6,931	南部地区	36,477	111,161	52,210	58,951
帯山西	3,545	9,011	4,344	4,667	出水南	4,164	12,009	5,704	6,305
帯 山	5,929	14,608	7,007	7,601	画 図	3,620	11,027	5,119	5,908
砂 取	3,443	8,393	3,745	4,648	田 迎	3,191	9,281	4,428	4,853
尾ノ上	5,062	13,188	6,326	6,862	田迎南	2,249	6,895	3,350	3,545
月 出	3,186	7,873	3,845	4,028	御 幸	3,014	10,526	4,788	5,738
山ノ内	2,938	8,581	4,141	4,440	日 吉	4,447	12,573	5,988	6,585
健軍東	2,183	6,736	3,210	3,526	城 南	2,062	5,803	2,736	3,067
東 町	2,718	8,469	4,170	4,299	川 尻	3,717	9,522	4,160	5,362
桜 木	4,279	12,267	5,899	6,368	力 合	4,391	12,855	6,186	6,669
秋 津	4,211	12,351	5,872	6,479	飽田西	739	2,818	1,325	1,493
若 葉	2,331	5,883	2,769	3,114	飽田東	1,735	5,805	2,748	3,057
泉ヶ丘	2,931	7,663	3,504	4,159	飽田南	552	2,076	914	1,162
健 軍	4,699	12,359	6,072	6,287	銭 塘	608	2,390	1,135	1,255
北部地区	43,464	122,385	59,543	62,842	奥古閑	953	3,779	1,803	1,976
池 田	6,992	15,048	8,123	6,925	川 口	699	2,527	1,231	1,296
高平台	5,251	14,975	7,048	7,927	中 緑	336	1,275	595	680

(注) 平成7年の世帯数の総数には世帯の種類「不詳」を含むが、各校区には含まれない。

